

先夫・後夫

先妻後妻があるのに先夫後夫の語はあまり使われない。おかしい。

「君は日の子 われは月の子 顔上げよ」 青森北の果てに立つ句碑。川柳界で独自の位置を占める時実新子の句。

彼女は先夫の死後二年で再婚。ベストセラーにもなった『有夫恋』出版の年の結婚だから、有夫Ⅱ先夫の存命中の他の人を恋ふる激しい歌であろう。

しかし、彼女は末期までよく先夫を看護し、車で見回りたいとの夫の願いをかなえるべく、眼鏡を三つも折るほど苦闘の末、運転免許証をとった日、死亡。「免許証を見る度に、ああ夫の死んだ日だ。…夫が骨になった時誰も泣かなかつたが私は号泣した。親や子との死別とは全く違って、もうあの肉体は消滅、縁もおしまいと、とても辛かった」。

有夫恋（彼女の造語か？）は今や『想夫恋』に赴かざるをえない。「当然、子供たちを始め皆が総スカン。自分で選んだ人を知らぬまままで死んではたまらない。子供た

ちには関係ない。死んでも迷惑はかけない。もう夫との二人墓も造った。墓銘は実名のみ、そして、『うらかな死よ その節はありがとう』と自筆で彫りつけ、生前の皆様への感謝をこめた……」。

再婚などにとかく言うことはないが、割り切れない思いが残る。『有夫恋』中の自分史表から子供の名はあるが先夫の名が意識的に外されている。彼女自らが公衆に語ってきた先夫への献身、号泣は何だったろうか。（黒田輝政氏主宰「生と死を考える会」誌二十四号講演に拠る）

（一九九六年八月二十四日）